

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
25

振興協議会だより

〔発行日〕平成29年6月23日
〔発行〕苗場山麓ジオパーク推進室
〔お問い合わせ〕025-765-1600

月夜立探訪記

資源探査部会では6月5日、爽やかな夏空の下、14人一行で荘厳なる月夜立(つきよたて、あるいは、つきよたつと呼ばれている)の探査を実施した。当日10時30分に小赤沢のとねんぼに集合して、林道ゲートまで移動し、軽トラ荷台に乗り合わせ深山に入り込んだ。いろは坂のように曲がりくねった坂道を上り、山から伸びる蔓に顔を打たれながら進んだ。月夜立まで約30分の地点で倒木があり、そこからは全員で歩くことにした。緩い登り坂を登ると道が大きく左に回り込む地点で、右手下に桧俣川が蛇行して流れ、その左岸に東電のトロッキ道が見える。さらに遠方には、鋭く天空に伸びる岩菅山が見えた。さらに足を運ぶと、やや広い平坦地があり、そこから大正時代の工事用道路が下り、川を渡る橋脚跡(大正時代の遺構)があるということが確認していない。さらに緩やかに登る。先頭を歩く面々の雄叫びに似た声が聞こえた。足早に遭遇し、左上を仰ぎ見た瞬間、身体に電気が走るような感動を覚えた。神秘的な名前の「月夜立」の岩壁が青い夏空にくっきりと見えた。ただし、その景観は全貌ではなく北端部に過ぎず、さらなる奥地へ足を伸ばした。次に仰ぎ見ることができた地点は、佐武流山登山道が林道と交差する地点であった。険しく伸びる沢には厚く残雪があり、そよぐ風は冷たく感じた。真っ青の夏空に縦に切り込む白い残雪、そして、急峻な岩肌は部分的に蝟燭のように細く並ぶ異形の景観である。緩やかに林道を下り、沢を巻き込み上がった地点から月夜立の南端全貌を見ることができた。鈴木牧之が感じたように、中国桂林に似た風景は、まさに霧が掛かると蝦蟆仙人の世界に入っていくようで、桃源郷のようでもある。

こんな素晴らしい景観は、苗場山麓ジオパークの代表的な景観として位置付けられ、その周辺に生育する植物群を含み世界遺産級の地域遺産として認識し、保全活用の方法を検討する必要がある。



最奥が岩菅山、手前の谷が桧俣川



月夜立



鋒状の岩

振興協議会総会と目代邦康氏による基調講演

平成29年度春期総会を5月31日に開催しました。このたびの大きな協議は、例年春と冬に開催していた総会のうち、冬開催の総会を「学術調査員とガイド部会など4部会を含め民・学・官合同」の協議会に変更するものでした。異論はなく、平成29年12月から年間活動目的や方法、予算などの協議を実施する方向で検討することとなりました。また、平成29年度の活動は、平成30年8月の再審査を想定し、申請書の読み直しから始め、やるべき事業内容の精査と優先順位、さらには防災学習を含めた平成34年までの長期計画の立案などを進めることを了解頂きました。

また、資源探査部会、商品開発部会、広報部会、ガイド部会から意欲ある活動報告とこれからの意気込み、そしていくつかの課題を報告頂きました。

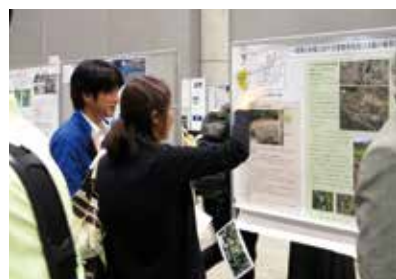
協議終了後、日本ジオサービス株式会社代表取締役の目代邦康氏から「より良いジオパーク活動のために 地域資源と地域活動の評価」と題した基調講演を頂きました。熱意ある話しに会員一同が引き込まれ、ジオパークの本質的意味とこれからの目標が明確に共有できたのではないのかと事務局では安堵している所です。



目代氏講演の様子

日本地球惑星科学連合大会2017

5月20日、千葉市幕張にて「日本のジオパークーしくじりから見えてくるジオパークの理想像ー」がテーマの日本地球惑星科学連合大会に参加しました。山陰海岸ユネスコジオパークを皮切りに、ふくい勝山など、6つのジオパーク(世界・日本)の発表がありました。いずれも再認定の審査で見送りになり、改めて再認定になるまでの苦悩の取組が紹介されました。来年度再認定の審査を受ける苗場山麓ジオパークにとって、目前の課題でもあります。3年前の原点に立ち返って、何をなすべきか洗い出し、着実に実践するしかないことを再認識したところです。



JGN全国研修会

5月22日、幕張テクノガーデンで開催された第10回日本ジオパークネットワーク全国研修会に参加してきました。ジオパークが取り組んできた持続可能な地域社会づくりとユネスコと文部科学省が推進するE S D(持続可能な開発のための教育)について意見交換をし、ジオパークの教育とはなにかを考えました。

自然環境・開発・気候変動・戦争など、私たちは様々な課題の中で世界の人々や地球環境とつながって今を生きています。そのことを認識し、この世界・社会をよりよく今後も続けていくための担い手を育てる教育がE S Dです。

縄文の時代から、この雪深い地域で暮らし、守ってきた先人たち。ジオパークを通じて、ジオ・エコ・ひとのつながりを学び、地域への誇り・郷土愛を育むため、これまで以上に学校と連携して教育活動を進めることが求められているとあらためて感じました。

ジオパーク研修会

5月23日にジオパーク研修(初級編)に参加をしました。5人の講師によりそれぞれ、ジオパークのそもそもの概念や仕組み、地質地形の保護、教育や住民とのコミュニケーションの大切さ等の講義がありました。中でも、ジオパークはパーク(公園・場所)という名前がついていますが、その概念は「ボトムアップ(住民の草の根活動)」による「地質地形資源の保護と活用」と「持続可能な地域社会づくり」の「取り組み」であるという点は私たちの活動の基礎となるもので、何度も注意をしながら振り返って確認しなければならなかったと感じました。



絵解きジオパーク イラスト:鈴木夏海



小学生が手をつなぎ囲んでいる大木は何かな?そしてその特徴は?

沖ノ原遺跡が45年ぶりにお披露目

国指定史跡でジオサイトでもある沖ノ原遺跡の発掘調査が実施されています。この沖ノ原遺跡は今から45年前の昭和47、48年に発掘調査が行われました。その結果、多くの竪穴住居跡や火焔型土器、クッキー状炭化物などが出土し、当時としては大きなニュースとなりました。この調査を指揮した慶応大学の江坂輝弥先生は文化庁を訪れ、遺跡の保存の必要性を説きました。史跡公園を整備し国民に広く知ってもらう必要があるとしています。そして津南町は、遺跡の範囲を買い入れ保存し、昭和53年に国指定史跡に認定されました。

この保存されてきた沖ノ原遺跡を45年ぶりに再発掘し、文化庁と県文化行政課の指導を受けながら今後5年計画で発掘調査を実施します。今年度は、精巧に作られた炉がある第1号住居跡を発掘し、記録保存を行います。来年度は、クッキー状炭化物が出土した第1号長方形住居の調査を予定しています。

ジオパークの根幹である保全の考えから、しっかりと守られてきた沖ノ原遺跡をこれからも保全し、その内容を後世に伝えていく必要があります。



芦ヶ崎小児童見学の様子

苗場山麓ジオパークのジオサイト

57 の見どころを随時紹介していきます

見倉橋（地質景観）



所在地 津南町見倉

種別 地質

見倉集落と中津川を挟んで対岸の結束集落を結ぶ橋です。新潟の橋50選にもなっており、橋から眺めるエメラルドグリーンの中津川と木々の美しさに息をのみます。昭和40年代、結束集落には、見倉集落へと続く道の冬の道踏み（雪踏み）と橋の雪落としの順番をしめす「見倉道踏巡次」の札がありました。札には、二人一組で、七班体制で行っていたことが書かれていて、冬には、3 m以上の積雪がある秋山郷において、重要な交通路の一つであった吊り橋の雪落としは大事な仕事であったことがわかります。

江戸時代の様子は、鈴木牧之による『秋山記行』の中で、「三倉橋之図」に描かれています。現在のような一本で繋がっている橋とは異なり、いくつかの岩の上に丸太を渡した筏橋というものです。

見倉橋がかかる地盤は、小赤沢から清水川原にかけて分布している結束層の岩石です。見倉付近の結束層の特徴は、安山岩、玄武岩の溶岩と火山砕屑岩ですが、変色して緑色になっていて緑色凝灰岩と呼ばれています。結束から小赤沢までの中津川沿いは溶岩が多く、上流の魚野川や雑魚川沿いには火砕岩が多く見られます。見倉橋付近の川原には、黒色泥岩～頁岩の層もみられ、貝化石や有孔虫なども含んでいます。橋を渡り、見倉集落まで上がると苗場山の第1期の火砕岩や溶岩の平坦地になっています。

野々海池のミズバショウ群落



所在地 栄村豊栄

種別 自然

野々海池は標高1,020mに位置し、およそ200万年前に千曲川左岸の大地が隆起した際に斜面崩落や地すべりによる凹地にできた池です。より多くの水を確保するために、廣瀬一郎氏をはじめ多くの地域の方々の尽力により、昭和24～30年にかけて土手が築かれ、農業用水用のため池となりました。

周囲には、ブナ林が広がり、冬は7 m以上の雪に閉ざされ7月初めまで残雪があります。雪どけとともにミズバショウが花を咲かせ、周辺ではモリアオガエルなどの水生生物やトンボ類、チョウ類などの昆虫、国の天然記念物ブッポウソウなど多様な生物を観察することができます。そして、近くの深坂峠からの眺望がすばらしく、紅葉の時期もまた格別です。

また、この池の主と蒲生池（十日町市松代）の主が戦った大蛇伝説も残っています。

野々海池がある関田山脈の稜線は、南へゆるく湾曲しています。また、東西に延びる稜線と水系が並走しています。地質的には、第4期の更新世の魚沼層群下部・中部層とその上の完新世の山麓崩積堆積物からできています。下部層は、主に安山岩質火砕岩・溶岩からなっています。中部層は、角ばった巨レキを含む土石流です。山脈をつくる地層は、千曲川方向に約20度前後南に傾いていて、地滑りや山地崩壊の要因にもなっています。

※地質学の学説は複数あり、現在も研究が続いています。そして、本地域の調査研究がこれからも行われる必要があります。

さかえタイムにてジオ学習

6月1日にさかえタイム(総合的学習の時間)の授業で栄小学校の3年生に苗場山麓ジオパークを紹介しました。「苗場山麓ジオパーク」を聞いたことがない子どもたちにスライドを映したり、黒板に図を描いたりして説明しました。子どもたちは苗場山に登った事もなく、山頂の写真を見せると驚いていました。ジオパークは「大地の公園」と言い直してから、「私たちは大きな動物園に住んでいる感じです。柵や檻はない、入場料もかからない動物園です。範囲は決まっています、栄村と津南町の全部です」と話すと、子どもたちはカモシカやリスなど、見かけた事のある動物を挙げました。「栄村と津南町のいろんな良い所や面白い所を知って、楽しんで、人に教える事が苗場山麓ジオパークの運動です。皆さんも『すごいこと探し』にお出かけしてみましょー!」と授業を終えました。



講師をしたボブさん(認定ガイド)

●津南中等教育学校 1 年生のジオ学習

6月2日津南中等教育学校に赴き、1年生 59 名にジオパークの出前講座を行いました。今回、1年生の総合学習の一環としてジオパークが組み込まれました。生徒たちは、事前に地理の授業と連携し、ユネスコ世界ジオパークや日本ジオパークについて調べていました。今回私たちは、当地域の大地の成り立ちやジオサイトの紹介、風穴という特殊な環境とそこに繁茂する希少な植物について紹介しました。これから、他のジオパークとの比較を行いながら苗場山麓ジオパークの調べ学習やジオサイトへ訪れる活動が予定されています。津南中等教育学校は津南町の子どもたちをはじめ、近隣市町村からも通学している生徒がいます。本地域の魅力がより多くの 10 代に広がっていくことが期待されます。



ガイドの活動

○ガイド認定式 ～新たに7人の認定ガイド加わる!～

4月16日総合センターを会場に、ガイドの認定証授与式が行われ、7人の合格者のうち、6人が参加されました。厳粛な中で、桑原正津南町教育長から認定証が授与されました。今回はじめて、津南中等教育学校の生徒さんも合格され、ガイドの会に仲間入りしました。ガイド養成講座主催者としては、もっと生徒のみなさんに参加していただける講座が求められるかと思います。新しくガイドになられた皆さんの苗場山麓ジオパークガイドとしての活躍を祈念します。そのためには、是非ともジオサイト巡りをはじめ、ガイド研修や津南学講座など、ご都合をつけて参加をお願いしたいと思います。今後、同僚や児童生徒への口コミや話題提供に努めていただき、認定ガイドの輪を広げてくださるようお願いいたします。



新たにガイドになった皆さん(中央6人)

○ガイドの会総会

認定式終了後、引き続きガイドの会総会が開催されました。はじめにジオパーク推進室長から「認定ガイドの今後のあり方」と題して、「①苗場山麓ジオパークの自然の案内及び②本地域の学習に励みましょう」と、2つの思いを語っていただき、本題に入りました。今年度の事業、とりわけジオサイト巡りについては、「楽しくゆったり、斬新に」をテーマに計画を紹介しました。午前午後各1箇所を重点的に巡ることとしました。昨年に準じて、今年度も認定ガイドからジオサイト巡りの案内のサポートをしていただきます。2年目に入り、ますます自信を持って案内できるガイドが増えてきています。他に、認定ガイド向けの講座として「他のジオパーク視察研修」や「新ジオサイト候補地の散策」等も進めていきます。いずれの講座も一般の方の参加も大歓迎です。振るってご参加ください。ジオサイト巡り・講座についてのお問合せは、ジオパーク推進室 ☎ 025-765-1600 まで。



総会の様子

絵解きジオパーク その答えは

この大木は樹齢 400 ～ 500 年と推測される幹回り 11.3m の杉です。幹が八本に分かれる特徴があり、その姿から「八本杉」と呼ばれます。外丸鎮守である「矢放神社」境内に植えられた由緒ある杉です。参道左右にも杉並木があり、これを八本杉と間違える場合がありますが、あくまでも町指定文化財の「八本杉」は境内地にある杉の大木を指します。